



吉本隆明+佐藤泰正

春秋社

吉本隆明(よしもと・たかあき)

1924年 東京に生れる

1947年 東京工業大学電気化学科卒業

著 書 『吉本隆明詩集』『言語にとって美
とはなにか』『共同幻想論』『心的
現象論序説』『増補 最後の親鸞』
『悲劇の解説』『空虚としての主題』
『マス・イメージ論』『隠遁の構造』
『白熱化した言葉』『吉本隆明全集
撰』(全7巻刊行中) 他

佐藤泰正(さとう・やすまさ)

1917年 山口県に生れる

1940年 早稲田大学国文科卒業

著 書 『日本近代詩とキリスト教』『文学
その内なる神』『近代文学 遠望』
『中原中也の詩の世界』『夏目漱石
論』編著『シンポジウム近代日本
文学の軌跡』『シンポジウム 日本
文学・夏目漱石』『鑑賞日本 現代
文学 椎名麟三・遠藤周作』他

漱石の主題

一九八六年十二月二十五日第一刷発行

著者——吉本隆明+佐藤泰正◎

発行者——神田明

発行所——株式会社春秋社

東京都千代田区外神田二一八・六

郵便番号一〇一

電話(〇三)二五五・九六一(代)

振替東京八一二四八六一

印刷所——図書印刷株式会社

製本所——寿製本株式会社

定価——一七〇〇円

装幀——加藤光太郎

ISBN 4-393-44404-3 Printed in Japan

まえがき

漱石は特異な連結の仕方のことを意味しているとおもう。そして漱石とはなにかを言おうとするとき、この特異な連結の仕方がどのくらいの度合で時代を象徴するパターンであり得たかを言うことに当たっている。まず留学時代の東洋と西欧の連結の仕方が特異であった。このふたつの洋は、「異種類」だと断案するほどに連結の断念をもたらしそうだったが、漱石は「こゝに於て根本的に文学とは如何なるものぞと云へる問題」を展開することで、はじめて深部にこのふたつを連結したのだといえよう。かれはこの連結の過程で、文学の批評と文学の歴史が「科学」だと明言し、それを文学論で実行したわが近代の最初で（もしかすると最後の）

文学者だった。このことは特筆に値している。最初の連結の特異さはつぎの連結の特異さを誘発した。つぎに特異なのは文学研究と作品形成との連結の仕方であった。それは順序の連結を意味したが、この順序は整序から混とんへ、あるいは冷静から白熱へということの意味していた。いってみれば『三四郎』のなかの「是から東京に行く。大学に這入る。

有名な学者に接触する。図書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采する。母が嬉しいが。」という順序の記述をとりあげてみれば、この順序にたいして喪失と無化に当った、ある別の順序を連結によって作りあげることであった。そしてこの別個の順序は、最初の連結の仕方から当然のように、連続体として出てきたものだといえよう。東洋から西洋へとこの順序が喪失されたとき、つきとめようとした文学とはなにかの「科学」的な記述の方法は、ふたたび『夢十夜』から『三四郎』にいたる過程で、作品形成の過程として反復された。そしていくくんばこの過程に類似したものとして、『それから』から『明暗』にいたるような内在からの混とん、あるいは混とんの内在性とも呼ぶべきものが成熟してゆ

く。文学とはなにか。それは西欧と東洋でもなく、非西欧と非東洋でもなく、すべてから同一であるようなひとつの〈場〉をつくっている微素子の集合を意味している。そしてそこまでいって漱石の連結の仕方は完成に達した。漱石の連結の完成は、漱石に剰余を余儀なくさせた。ほんとうはなぜ文学的な表現の完成が、人間的剰余をのこすのかよく判っていない。それにもかかわらず（それだからこそ）文学は欲求の対象としてはエロスに次ぐ魅力をもっていることは、漱石のばあいでもおなじであった。かれの晩年の漢詩の詩作は剰余のようにみえるが、それはかがやかしいエロスを感じさせる。

わたしたちのあいだで当然のように『夢十夜』のような初期の重要な作品と、『文学論』や『文学評論』のような、文学とはなにかの追求や、連結の仕方の特異さは話題にのぼった。それと一緒に漱石のエロシ的な願望や理想の所在についても触れることになった。漱石の連結の仕方のなかで、いちばん曖昧で多様で謎なのは、学校との連結、女性との連結である。大学へ入学することはどういうことだったのか、後に夫人にな

った女性と見合いし、結婚するということは、どういうことだったのか。これは作品のなかの高等遊民の概念とともに漱石の連結のなかで、いちばん判りにくい部分をつくりあげている。ここでは話題としていくらか心残りであった。

昭和六十一年十一月二十二日

吉本隆明

まえがき 一 吉本隆明

PART 1 文明の中の漱石 ————— 7

いま、漱石とは？ 8

明治以降の全問題を象徴 17

初期作品の問題点 31

戦後作家としての漱石 37

三角関係と文明論 53

漱石の狂気 56

漱石の病跡 69

漱石の時代と現代 84

PART 2 無意識の中の漱石 ————— 101

方法としての《夢》 102

第三夜 110

第九夜 118

第七夜 124

第四夜 他 131

作家としての漱石の誕生 139

意識と自然の問題 143

「文学論」をめぐる 153

漱石の文学者像 163

PART 3 漱石の場所

文学史の中の漱石 180

漱石と鷗外の問題 190

制度としての結婚 202

漱石の描いた女性 209

夫婦の眼——道草 223

自然・天・神 237

晩年の漱石——良寛との共通性 249

漱石の漢詩と明暗 255

漱石の最後の場所——明暗の意味 263

おわりに〈現在の中の漱石〉—— 273

重くなる現代の苦悩 274

注 ☆ 1 ～ 11 99 ☆ 12 ～ 15 177 ☆ 16 ～ 20 271

あとがき 対談を終えて 287 佐藤泰正

漱石的主题

文

明

の中の

PART I
文明の中の漱石

漱石

いま、漱石とは？

佐藤

これから三回、夏目漱石について、吉本さんのお話をうかがったり、いっしょに考えてみたいと思います。

漱石は「国民的作家」だといわれています……

こんど、松田優作の主演、森田芳光監督で「それから」という映画ができましたが、あれが文部省推薦になるということで、スタッフ一同が困惑してるんだという記事が出ておりました。つまり、松田優作のイメージ、森田芳光のイメージですと若いファンがいるわけで、それが文部省推薦だとちょっとイメージが変わるし、文部省の推薦というよいことではファンが逃げちゃうんじゃないかというんです。私は、その記事をきのう読んで、笑いながら、おもしろいと思ったんです。

それは裏を返せば、昔から、子供がいろんな小説を読みふけているとちょっと困るというようなことが言われていて、漱石なら親も安心していられるところがあるからだと思うんです。しかし私には、漱石はそういう「国民的作家」というイメージじゃなくて、突っ込んで考えてみれば、たいへんな問題を抱えている、ひとつの爆弾を抱えたような作家だと思います。

実はこの夏に、有島武郎について少ししゃべることがありまして、有島のことをいろいろ読み返したりしてたんです。そうしたら伊藤整は、なかなかうまい言葉で言っているんですね。有島というのは、近代文学史の中で、「過ちのごとく爆発のごとく存在した作家だ」と。つまり有島にかぎらず、太宰治であれ、古くは北村透谷であれ、優れた作家というのは、実はたいへんなものを抱えているわけで。そういう意味では漱石もまさに、まあ「過ちのごとく」とはいえないまでも、まさに爆発的な存在としてあったのではないかと思うんです。

それが、どうも「国民的作家」というペールで、あんがい誤解されているところがある。だから、小林秀雄とかいろんな読み手が、意外に漱石にふれていないということは、ほとんど敬遠しているというか、読まず嫌いというか、そういうことではないかと思うんです。

漱石は新聞小説の作家としてずっと通じた人ですけれども、もし新聞小説の作家でなければ、たいへんラジカルな実験をもっとやれた人ではないかという感じがします。私流に言えば、新聞小説を書きながら、いわば新聞小説の枠を破るというか、底を踏み抜くというか、そういうことをやろうとした人ではないかと思うんです。そういう漱石のラジカルな部分とか、あるいは深さ、新しさみたいなものが、やっぱり現代でも漱石がずっと読まれているところだろうと思うんです。そこをもういっぺん問い直すというか洗い直してみようというように、いろいろ吉本さんからお話がかがえればと思います。



佐藤

◆出会い

私がライフワークにしているのは宗教と文学、キリスト教思想と文学の問題なんですけれども、漱石と自分との出会いは次のようなことでした。

私は十六の時に東京に出まして、そして仲間と文学雑誌をやったりしてたんです。そのとき、たまたまドストエフスキイの『罪と罰』を読みました。例の新潮社の「世界文学全集」で、中村白葉の訳でした。二段組で字がびっしり詰まっている。あれを読んで、いままでもぜんぜんそんなものにふれたことのない環境だったものですから、たいへん衝撃を受けました。内田魯庵が明治のなかばにはじめて英文から『罪と罰』を訳したわけですけれども、そのときにドストエフスキイに出会って、曠野で落雷に遭って目が見えなくなつて、耳が聞こえなくなつたような、そういう衝撃だったと言っているんですけれども、私も幼な心にたいへんな衝撃を受けました。

そのあたりから、それまでまったく問題として持っていなかった宗教と文学、キリスト教と文学というようなものに目が開いて、やっぱり、自分が文学をやるのにこれをひとつのテーマ、ライフワークにしてみたいな、というようなものが芽生えてきたわけです。そこでドストエフスキイを中心に芥川龍之介とか、フランスのキリスト教作家だとか読んだりしてたわけです。

ところが、明治以後の日本の近代作家にその問題を持ち込んでいくと、たしかに多くの作家たちは、若い時にキリスト教に入っちゃう、洗礼も受ける。しかし、島崎藤村をはじめ、みんな出ていくわけですね。そしてまた、最後はいろんな方に走っちゃって、たいへんに曖昧な形